

「男、突っ走る！」

第98回

第一稿

作・壽倉 雅

1 南公民館・全景

2 同・小会議室

演出席に座っている山中——住吉が手を叩きながらリズムを刻んでいる。

それに合わせてダンスを踊っている雅也、藍那、まひる、その他の出演者たち。

住吉「はい、ストップ。(と雅也に) うっちーさん、手と足が一緒になってます」

雅也「えッ……」

住吉「左手が前の時は、右足が後ろ」

雅也「(振付をやってみて) 左手が前で、右足が後ろ……」

が、ぎこちない振りになっている雅也。

住吉「うっちーさん。論理的思考タイプですよ?」

雅也「はい。なので、一個一個の動作を言語化しないと整理できなくて……」

住吉「ダンスの動画、これから撮りますので、

しつかり復習してください」

雅也「はい」

山中「うっちー、しつかり」

雅也「はい」

3 同・大会議室

台本の読み合わせや演技の確認をして
いる直海、美央、緑、愛花、寿梨、翔
子、洸、ゆりえ、裕作、泰明、美穂子、
千世、亜里沙、隆太、翔、理央、その
他出演者たち——雅也、藍那、まひる
たちが戻ってくる。

雅也「ナオ、ゆりえ、翔子さん。小会議室で、
場面稽古だそうです」

直海「はい」

ゆりえ「ありがとうございます」

翔子「じゃあ、行ってきます」

と、出ていく直海、ゆりえ、翔子。

雅也「（藍那とまひるに）いやあ、どうもダ
ンスは上手くないかね」

藍那「他の人たちと比べたら、それほど難し

いダンスではないはずなんだけどね」

雅也「お恥ずかしい話、俺はこういうのには

本当に弱くて……」

まひる「とにかく練習あるのみですね」

雅也「そうだね」

と、佐代子が入ってくる。

佐代子「お疲れ様です」

一同「お疲れ様です」

佐代子「（雅也に）ヤマさんは？」

雅也「今、小会議室でナオとゆりえと翔子さ

んの場面稽古してます」

佐代子「そう。ほら、例のこと、ヤマさんに

相談したくて」

雅也「ああ、あのことですね……」

4 同・小会議室

雅也、佐代子、山中、直海が話している。

山中「え、PRですか？」

佐代子「そうなんです。ちょうど舞台本番の二週間前に、中央交流センターのエントランスで特設ステージを組んで、ハロウィンライブをやるんです。それで、今回の『神様が願うまで』のPRも兼ねて、出演をしようかと思って。メインどころであるナオや洸さんにも出演してもらって」

直海「けど、私はこっちの稽古もありますし。ライブとはいえ、人前に出るとなると練習しなきゃいけないですよ」

佐代子「予定では二十分ぐらいのプチミュージカルみたいな感じにしようかと思ってるの。ハロウィンだから、まあ魔女とかそういう仮装もしてね。エントランスライブなら、通りすがりの人たちも来るから、良い宣伝にもなると思うの」

雅也「……」

山中「ですが国枝さん。いくらPRのためとは言っても、ナオは主演で、出ずっぱりでこれから稽古も重ねていかないといけない

んです。これ以上、ナオの負担になるようなことは」

佐代子「ナオには、一曲か二曲、既存の歌を歌ってもらって、後は段取りさえ覚えてもらえれば、それほどセリフも多くないようにしようかと思ってます」

山中「そのライブは、国枝さんが脚本と演出をするってことですか？」

佐代子「脚本は私が書きますが、全体の総括と演出は住吉先生に相談してます。住吉先生のダンス教室の生徒さんにも出演してもらって、インパクトのあるステージにしようかと思ってます」

険しい顔でお互いの顔を見合う雅也と直海。
山中「そこまで話が進んでるんならしようがないですけど、くれぐれも『神様が願うまで』のナオの稽古に影響が出ないようにしてください」

佐代子「分かりました。（と雅也に）うちーにも出てもらおうと思ってるから、よろ

しくね」

雅也「え、僕もですか？」

佐代子「そりゃ、『スリジェネ』のリーダー
だし、出演機会があったほうが良いでしょ
う」

雅也「まあ、それはそうですけどね……」

難しい顔の山中。

5 コンビニ・駐車場

緑、愛花、タバコを吸っている山中が
話している。

緑「え、国枝さんそんな話持ってきたんです
か？」

山中「普通このタイミングで、ナオに出演さ
せるかな。いくらPRが目的って言ったつ
て」

愛花「二十分なんて簡単に言いますが、短
編劇だって稽古ちゃんと重ねないと良いも
のなんて作れないのに、残り一ヶ月でき
るんですかね？」

山中「まあ、俺はノータッチだから何も言うつもりはないけどさ。ただ、ナオが可哀想でさ」

愛花「ですよね」

と、雅也が店から出てくる。

山中「うっちー（と呼び止める）」

雅也「（振り向いて）お疲れ様です」

愛花「聞いたよ、ステージライブのこと」

雅也「ああ……、そのこと」

緑「うっちーは運営として、どう思う？」

雅也「どう思うも何も、国枝さんが決めたことに反対なんてできるわけないじゃないですか。それに、許可とか相談というよりも、ただの報告ですからね。僕たちがどう言おうと、もう話進めちゃってるんですけど、もし、どうしようもないじゃありませんか」

愛花「ナオが可哀想」

雅也「もうこれ以上、板挟みは勘弁してくださいよ……」

山中「別に板挟みにしてるわけじゃないよ」

雅也「(ムツとして)板挟みじゃありませんか。今の、この『神様が願うまで』のキャストたち、派閥ができてるのご存じでしょう。ヤマさんややっさんやミドリさんやむぎっていうゴリゴリ演劇系の人たち、それから住吉先生のダンス教室の人たち、子どもたちとその保護者、それから運営チーム……方々からいろいろ相談や愚痴を聞かされてる僕は、今や『スリジェネ』のクレーム処理係で、サンドバック状態なんですからね」

愛花「何だろう……否定できない」

雅也「円滑に事が進むように、あっちにもこっちにもヘコヘコして良い顔するのも大変なんですからね」

緑「まあでも、うちーがそういう潤滑油になってるから、まだ上手く行ってると思うけどね」

雅也「もうこれ以上のトラブルは、勘弁してほしいですよ……」

6 南公民館・廊下

休憩中。

直海と寿梨が話している。

寿梨「え、そんな企画あるの？」

直海「もう話進んじやってるから、出るしかないんだよね」

寿梨「誰が出るの？」

直海「私と洗さん、あとうちーと、住吉先生のダンス教室の生徒さんだって。国枝さんが脚本書くんだけどね」

寿梨「大丈夫かな？」

直海「さあ」

と、雅也が戻ってくる。

直海「あ、ねえうちー」

雅也「お疲れ」

直海「ねえ、あの話どうにかならないかな」

雅也「どうにかって？」

直海「国枝さんの脚本だと、どうも心配で」

雅也「そっか……」

寿梨「うちーがさ、国枝さんの脚本添削すれば良いんじゃない？」

直海「そうだよ。うちー、脚本家としての実績あるんだから」

雅也「簡単に言わないでよ。そもそも、国枝さんの世界観って独特だから、俺には直せない」

寿梨「そっか」

直海「PRのために、わざわざ別に稽古してライブなんてやる必要あるのかな」

雅也「それが国枝さんとしての、『神様が願うまで』のプロモーションなんだよ。まあ、俺が出演するって話を聞かされたときはびっくりしたけどね」

直海「二つも同時進行できるかな」

雅也「ああ…：こういう時、コウタやとみーがいたらなあ」

直海「確かに、今運営にいるメンバーって、またうちーだけになっちゃったんだもんね。あの二人がいたら、うちーの負担だ

ってどれだけ減るか」

寿梨「うちー今、サンドバック状態だもんね」

雅也「え、分かる？ さっき、ヤマさんにもサンドバックの話したんだけど」

寿梨「見れば分かるよ。うちーの立ち位置が、一番可哀想なところだよね」

雅也「そうかもしれないね……。戻ってきてくれないかな、コウタもとみーも」

寿梨「そういえば、本番は見に来るって言うてたよ」

雅也「本当？」

寿梨「うん」

雅也「話聞いてもらおうかな。こっち帰ってきたら」

と、階段を駆け上がって談笑する亜里沙、隆太、翔、理央たち小学生メンバ
ーの声が聞こえてくる。

隆太「あ、うちーだ！（と抱き着く）」

雅也「りゅーた、お疲れ。ちゃんとやってる

か」

隆太「うん」

翔「嘘つけよ」

隆太「本当だし」

理央「（亜里沙に）ねえ、あの事うちーに聞いてみたら？」

亜里沙「そうだね。（と雅也に）ねえうちー。個人練習ってして良いのかな？ 私たちだけで練習しようと思ってるんだけど」

雅也「個人でやる分には問題ないよ。ただ、怪我とか事故があった時に責任は負えないことはだけは伝えとく。と言っても、こんな話しても分かんないか。良いわ、俺から保護者の皆さんに連絡入れとく」

亜里沙「ありがとう」

隆太「じゃあ、またあとでね」

と、大会議室へ入っていく亜里沙たち。

直海「子どもたちは、やっぱり元気だね」

雅也「自分たちで個人練習するなんて、大したもんだよね」

寿梨「そういう相談も、うちーに行くんだね」

雅也「そりゃ、ずっと稽古場にいる運営陣と
言ったら俺しかいないんだから」

直海「あれ、そういえば国枝さんは？」

雅也「もう帰ったよ。ハロウィンライブの相
談に来たのが、今日の目的だから」

直海「総合プロデューサーだったら、稽古場
見学して、私たちに激励の一言でも伝えて
くれたら良いのに」

寿梨「そういうことするような人じゃないで
しょ」

直海「そうでした」
しよっぱい顔の雅也。

7 同・全景（二週間後）

N 「二週間後、国枝さんが執筆したハロウイ
ンライブの脚本が完成し、同時進行での稽
古が始まりました」

8 同・表

美央が入ってくる——後ろから裕作がやってくる。

裕作「おはよう、ミオ」

美央「おはよう、ゆーさく」

裕作「今日から通し稽古だな」

美央「通しつてなると、やっぱり緊張してくるね」

裕作「お互い頑張ろう」

美央「うん」

9 同・大会議室

稽古の準備をしている山中、緑、泰明、愛花、寿梨。

緑「通し稽古だって言うのに、主人公のナオがないなんて……」

山中「あれほど、『神様が願うまで』の稽古に影響が出ないようにしてくれって言ったのに」

泰明「向こうは、ナオちゃんと洗君とうっち

「―以外に誰が出るの？」

緑「確か運営の田所さんと、国枝さんの娘さんの茉奈さん、あと美穂子さんと千世ちゃん親子ですね」

泰明「（山中に）主役の二人がいなくて通し稽古できますかね？」

山中「二人がメインのところは、最悪カットします。また個人稽古するしかないですね。通し稽古に参加できないのは、本当に痛いんですよ」

緑「本当に、どうかしてますよ、ここの運営は」

難しい顔で顔を見合わず愛花と寿梨。

10 同・小会議室

台本を見ながら稽古をしている雅也、茉奈、田所、直海、洸、美穂子、千世――佐代子と住吉が話し合いながら演出をつけている。

住吉「千世たちはダンスが終わったら上手に

はけて」

千世「はい」

住吉「で、千世たちがいなくなったのを確認したら、入れ替わりでうっちーさんが下手から出てきてください」

雅也「はい（と台本に書き込む）」

佐代子「ここで、うっちーがアドリブで良いから、楽しい感じでスキップとかして、ゆるーい雰囲気を出してほしいの。そこで、魔女役の田所さんがバーンと出てくる感じにしたい」

田所「じゃあ私は、堂々と出てきたほうがカッコ良いわね」

住吉「この二人の掛け合いをしてる間に、次のダンスチームの着替えをしないといけな
いから……（と美穂子に）美穂子、この時裏で着替えのフォロー入ってくれる？」

美穂子「分かりました。衣装フォローだけで大丈夫そうですか？」

住吉「まあ、メイクは本人たちで行けると思

うわ」

美穂子「分かりました」

佐代子「で、この後に田所さんのソロがあるんだけど、その途中で客席の方を回ってナオと冨君が登場するって感じ」

直海「はい」

冨「ここは、どういう雰囲気が出来たら良いですか？ 不思議な世界に迷った感じのほうがいいですか？」

佐代子「ハロウィンライブの常連っていう感じで、初めて来たナオをエスコートするように出てきてほしい」

冨「エスコート？ できるかな」

雅也「冨さんならいけるって。何か慣れてそう」

冨「いやいや、うちー。それは偏見すよ」
雅也「これは失礼しました」

佐代子「あ、この田所さんのソロの間に、うちーは上手はけで次のキャラクターに着替えてね。速攻で」

雅也「カラスの次はジャガーですか……衣装の工夫が必要かもしれないですね。カラスのメイクを取って、ヒョウ柄のメイクをする時間もそんなになさそうですし……」

佐代子「理想的なタイミングは、この後のナオと洸君のデュエット曲が終わったら、シマウマ役の茉奈と、うっちージャガーが一緒に出てきてほしい」

茉奈「ナオちゃんと洸さんのデュエットの歌って、大体三分だよね」

洸「多分それぐらいです」

茉奈「じゃあ、田所さんの歌と含めて大体六分ぐらい。うっちー、その間に準備できそう？ 私も手伝うから」

雅也「多分行けるとは思いますが、一度その動きも確認させてください」

佐代子「分かった。じゃあ、また通し稽古の時に確認しましょう」

雅也「お願いします」

11 同・廊下

雅也と直海が小会議室から出てくる――
――大会議室からキャストたちがぞろぞろと出てくる。その中に寿梨と美央がいる。

寿梨「さつき通し稽古終わって、今から休憩」

直海「終わっちゃったんだ、通し稽古」

雅也「間に合えば合流したかったんだけどなあ」

寿梨「主人公の二人がいないと、全然作品としての雰囲気がかんない。キャストの中には、ハロウィンライブのことあまりよく思っていない人もいるみたいだよ」

直海「そりゃそうでしょ」

美央「何か、最近の稽古場、ちよっとピリついでるね」

雅也「また愚痴聞かされそうだな。サンドバツクのうっちゃーですから」

直海「そうだね」

雅也「『スリジェネ』に残るのも、やっぱり

時間の問題なのかな」

美央「うっちー……」

直海「ようやくうっちーも、そう考えるようになったか」

雅也「まあね……」

美央「これから、どうなっちゃうんだろうね」

寿梨「どうだろうね」

直海「さあ、私の知ったことじゃないよ」

雅也「ああ、胃が痛くなりそう。コウタとと

みーがいてくれたらなあ……」

溜息をついて腕を組む雅也。

つづく